

地域で子どもを育てる活動発表会 ～今年度の成果と課題を共有しました～

1月14日、遠野市民センター大ホールを会場に、地域で子どもを育てる活動発表会を開催しました。PTAや地域関係者など約170人に参加いただき、コミュニティ・スクール（以下「CS」とする。）の成果と課題を共有しました。

■ 試行の年の取組内容を共有した「パネルディスカッション」

はじめに、各中学校区のエリアコーディネーター（以下、「コーディネーター」とする。）を中心に、今年度実践した取組を以下のとおり発表しました。

▶青笹地区の「こども本の森を活用した読書推進の取組」では、新田コーディネーターのほか、青笹町地域教育協議会長の佐々木謙氏と青笹小学校PTA会長の馬場貴之氏が登壇。これまで学校と地域が連携して行ってきた読書の取組を基盤に、CSによって、一步進んだ取組としたことについて発表いただきました。

▶遠野西中学校の「銀河ドリーム教室の支援」では、浅沼コーディネーターのほか、当日講師として対応した多田農産の多田貴博氏が登壇。子どもの成長を見据えながら地域の資源を学校につなぐ際のポイントなどについて発表いただきました。

▶綾織小学校の「地域連携の取組」では、佐々木コーディネーターのほか、綾織小学校長の平芳則氏が登壇。学校部会の会議を基軸に、学校部会委員の参画を得ながら進めてきた畑作業をはじめとした取組を通じ、子どもたちが「地域の人たちは自分たちを応援してくれている」ことを再認識したことなどを発表いただき、CSによる子どもたちへの影響なども共有することができました。



パネルディスカッションの様子。次年度につながる意見が多く出されました。

事例発表後に行ったパネリスト同士の質疑応答では、地域と学校がつながるポイントについて質問が出され、平氏から「学校と地域のトップ同士がコミュニケーションを取ることが重要」と回答。馬場氏からはPTA活動とCSの連携方策について言及があるなど、学校運営協議会や学校部会さながらの活発な意見交換が行われました。

■ 成果と課題を示した「情報提供」とこれからの方向性を示していただいた「助言」

その後、市担当者から今年度の成果と課題について情報提供しました。課題解決に向けた取組が見られ始めたことや、コーディネーターによって人材や資源が発掘されていることを成果とした一方、地域教育協議会の位置づけの整理が必要なことなどを課題として示したうえで、CSと地域教育協議会のねらいを改めて説明。来年度は、「コミュニケーション」をキーワードに「トライ＆エラーの1年」と位置づけるとしました。

終わりに、中部教育事務所の秋澤美加子主任社会教育主事から「遠野市のCSは、子どもを育てることを話の中心に据え、ステップを踏んでいる。成果を急がないで、学校と地域の信頼関係を育てていただきたい。中部教育事務所も取組を支援していく」とお話しいただきました。

参加者からは「地域の方が子どもたちに対して想いを持っていることを改めて知った」「CSと地域教育協議会の違いが整理でき有効だった」など、数多くの感想をいただきました。市教育委員会では、いただいたご意見を参考にし、CSと地域学校協働活動の一体的な推進に向け、さらに取り組んでまいります。



助言いただいた、中部教育事務所の秋澤美加子氏

事例発表と情報提供で投影した資料は、市ホームページで公開しています。遠野市ホームページ「コミュニティ・スクールの推進」のページでご確認ください。



こちらのQRコードからも確認できます。

次年度に「つながる」学校運営協議会・学校部会



遠野中学校区学校運営協議会の様子。委員一人ひとりから示唆に富んだ発言が多く見られました。

1月から2月にかけて、学校関係者評価と今年度の地域学校協働活動を協議の中心とした学校運営協議会と学校部会が市内全ての小・中学校で行われました。

このうち、2月7日に行われた遠野中学校区学校運営協議会（小林立栄会長）では、中学校区内の小・中学校長から学校評価や地域学校協働活動の状況等について説明が行われた後、委員からは「共通の話題として『あいさつ』が挙げられている。次年度のまなびフェストへの反映について検討したい」「よく『地域』と表現されるのは、保護者の上の世代。3つの世代をどうつないでいくか。子どもたちは、思っている以上に大人を見ていて、大人のつながりが、結果子どもを育むことにつながるの、そのための取組を進めていきたい」などの意見が出されていました。今回開催された各学校運営協議会や学校部会では、多くの会議で、参加した委員全員から一言以上発言の機会を設けるなど進行の工夫がされたほか、学校評価の説明においても、良い点だけではなく、課題についても説明し共有することで、改善に向けて委員から主体的な意見が活発に出される様子が見られており、会議の持ち方においても、今年度の取組を踏まえ、改善に向けた動きが見られ、さまざまな面で次年度につながる機会となったようでした。

■ 学校運営協議会・学校部会で出された意見から

1年間CSの委員として活動したことで、この仕組みは「先生方の想いをきちんと理解すること」が重要と改めて認識した。

「学校への敷居」が話題となっているが、低くするひとつの方策は「学校へ来るきっかけを作る」ことではないか。みんなが来やすいきっかけを考えなければ。

取組に参加いただく大人に「取組の目的」をきちんと理解いただくことが必要。コミュニケーションを狙った「茶飲み話」をする機会も有効。



「あいさつ」の取組では、子どもと大人の認識の差がある。子どもたちと「望ましいあいさつの姿」を共通理解し、地域に広げていく流れも考えられる。

学校評価は、次の年につなげることが重要だと思う。課題をお話いただいたことが、次の年に生きてくるのではないか。

「読書」は、何のためにやるのか。なんとなく「良いもの」で終わっていないか。具体的にどんな力がついたり、価値があるのか。改めて学ぶ必要がある。

課題の発見・解決を目指した「熟議」が行われました

12月に市内3か所で、「熟議」が行われました。熟議は、目標の共有や多様で複雑な課題の解決に向けて有効な手法のひとつとされており、本市のCSの推進においては有効な手立てと認識し、機会を捉えて開催しています。また、8月には課題発見・解決に向けた熟議の手法についての研修会を開催しており、今回の熟議は研修した内容を実践しました。このうち土淵小学校部会では、学校部会委員のほか、地域住民、保護者、教職員26名が参加。中部教育事務所等の支援をいただき「私達が『体験』を通じて、子どもたちにふるさと遠野・土淵の良さを伝えよう」とするとき、それを難しくする要因には何が考えられるか？」をテーマに話し合いが進められました。中間に行われる「難しくする要因」については、①人の数や高齢化やコミュニケーション不足に起因する「人」、②「時間」、③時代の変化や新型コロナウイルス感染症に起因する「環境」の3点に絞られました。その後「3つの要因の難しさを弱めるために自分ができること」について、さらに意見交換が行われました。参加者からは、「子どもがやりたいと思ったら一緒に学び楽しむ」「完璧にしようとしなない」「活動にとりあえず参加してみる」などの意見が出されていました。出された意見については、学校部会で改めて議論を進めるとともに、全て学校が主体的に取り組むということではなく、地域や保護者も含め、それぞれの団体が既存の取組との関連付けなど、できることからやってみることが重要と考えています。熟議と部会の協議の関連付け等については、今後、実践に向けて教育委員会として支援にあたりたいと考えています。



土淵小学校部会の熟議の様子。和やかな雰囲気のもとで、活発に意見が出されました。

土淵小学校部会では、この熟議の様子を「土小コミュニティ・スクールだより」にまとめ、土淵町内全戸に配布しました。このたび、遠野市ホームページにも公開しましたので、ぜひご覧ください。以下のQRコードからもアクセスできます。

